

「小橋勝之助日誌」(三) — 「天路歷程」

解説 — 「小橋勝之助日誌」(三) — 「天路歷程」をめぐる
はじめに

ここに紹介する「小橋勝之助日誌」は大阪市淀川区にある社会福祉法人博愛社所蔵になるものである。児童養護施設博愛社の創設者小橋勝之助(一八六三—一八九三)は生涯三冊の日誌を残している。今回の日誌は表紙に「天路歷程」と墨筆で記されているもので、一八九二(明治二五)年二月二日から同年十二月三〇日までのものである。この日誌については、さきに「小橋勝之助日誌(二) — 天路歷程」(『関西学院大学社会学部紀要』一〇五号)として、冒頭の九二(明治二五)年二月二日から同五月末日までを翻刻し紹介した。今回はその続きとして六月一日から七月一日までを翻刻するものである。

一、日誌「天路歷程」の背景

日誌を紹介するにあたり、前稿(「小橋勝之助日誌(二) — 「天路歷程」)と重複する記述となるが、博愛社やこの時期の小橋個人のことにつき若干ふれて、日誌の背景を瞥見しておくことにしよう。

室田保夫・鎌谷かおる・片岡優子^{*1}
^{*2}
^{*3}

一八九〇(明治二三)年一月、小橋勝之助の尽力によって播州赤穂の地に創設された博愛社は、翌九一年七月二五日、念願の普通学校を開校した。しかし開校間もなく石井十次の経営する岡山孤児院との合併の議が浮上し、かくて九一年一〇月二日に博愛社と岡山孤児院は合併する。そして博愛社の財産を岡山孤児院に寄附し、普通学校も岡山孤児院の付属となる。しかし博愛社創設の中心人物、小橋勝之助は九三年三月に死去する。その死後、九三年四月二〇日再び両者は独自に歩んでいくことになるが、一年半共同の歩みをしていくことになるのである。したがって、この日誌には博愛社が岡山孤児院との共同歩調の中にあることを背景として考えておく必要がある。そしてこの時期、近代日本災害史の中でも有数のものに数えられる九一年一〇月末の濃尾大震災の勃発があり、石井や小橋はその救済活動に積極的に関わっていくが、この件についても日誌を読み解く背景に入れておく必要がある。すなわち石井は名古屋に震災孤児院を創設し、孤児救済事業を展開していくが、石井の動向とともに小橋のそれへの関わり等、こうした背景もこの日誌から貴重な事実を読み取ることができるのである。しかし彼の身体は迫り来る病魔に勝てず、翌九三年三月、小橋は天に召されることになるのである。

そうした小橋の病気との闘いの日々、あるいは彼が医学の知識を背景に病気と如何につきあっているか、ということをも具に窺うこともで

きる。そうした病魔との格闘の中で、小橋は博愛社の北海道移住のことも考えていた状況であった。さらに人間関係に関して触れておくと、これは博愛社の歴史にとっても重要であるが、実之助や兄弟達の動向、後に弟実之助とともに博愛社の経営に大きな貢献をし、博愛社の母として、そして後に大阪婦人矯風会において活躍していく林歌子の事業への参加も大きな出来事であった。こうしたことが具に日誌に顕現しており、かかる事実がこの日誌「天路歷程」によって初めて明らかになるのである。

二、今回の日誌の内容について

さて、今回紹介する日誌は六月一日から七月一〇日までの約一ヶ月半に過ぎないが、ここには上述した岡山孤児院との連携のもとで展開される博愛社の事業や震災孤児院のこと、小橋の病魔と格闘する痛々しい姿を日々、具に窺うことができる。しかし今回紹介する日誌の中で特筆すべき特徴は北海道視察旅行の件が初めて明らかになることであろう。小橋は従来から博愛社の移転先に北海道を考えていた。病氣でありながら、彼はこの年に病身を押し実現するのである。ここではこの旅（漫遊）についてのみみておくことにする。

旅行前日の六月三日の日誌によれば、小橋は岡山孤児院の朝の集会において、北海道行き（渡遊）のことを報告し、石井十次らと会談している。そして博愛社に帰り翌日に神戸に向け旅の途に就いている。ちなみに石井の日誌には「小橋君漫遊の途に上らる」（六月三日）とあるのみで、この文言以上に小橋の旅に関する石井の所感は窺えない。小橋はその後、大阪から京都へと向かい一日に京都に着す。そして一五日に大垣、その後名古屋へ行き、震災孤児院を訪問し、二二日に東京に到着している。東京では多くの著名なキリスト者や社会事業家

二
にあっていることは、今回の翻刻箇所を読まれば理解できよう。

その後、七月二五日に上野駅から仙台に向けて出発する。その夜に仙台に到着し、直ちに仙台孤児院を訪問している。二八日に仙台を立ち、青森を経て二九日に函館に到着する。そして三一日、船にて室蘭に着し、林竹太郎の経営する北海道孤児院に寄寓することになる。そして八月二日の日誌には「林竹太郎と博愛社北海道孤児院合同の件に付き大ニ談する処ありし」とあり、林と博愛社と北海道孤児院のこと、あるいは将来の構想について毎日議論している。その後、小橋は札幌や岩見沢付近を旅し、多くの人に会うのである。

そして九月六日に林らに別れを告げ帰路に就き、翌七日函館に着し、九日に東京に戻り、東京にて多くの人に会い、主に北海道の土産話をし、一五日に東京を立ち、名古屋に寄り、九月一七日に博愛社に帰っている。その日の日誌には「午前四時起床喫飯人力車を雇ひ、名古屋停車場に行き五時四十六分発の汽車に乗り込み午後五時過ぎ那波駅に着す其より人力車を雇ふて鶴亀村に行き木村氏宅に荷物を預け歩行して西後明村坂下に至りしに疲労して進む能はず即ち人を雇ふて博愛社に報ず直ちに籠を以て迎ひに来らる十時頃博愛社に着す十二時頃迄談話せり無事博愛社に帰りし事を主に感謝すアーメン」と認められている。このように、北海道への往復路において当時の彼の人間関係や施設の動向等貴重な情報を窺うことができるが、この旅は非常なる激務であった。彼にとって健康上から判断すると決して良かったとは思われないけれども、博愛社の将来のこともあり、そして育児事業を覚悟する彼にとって、この北海道への旅はまさに命をかけた三ヶ月半に亘る視察の旅であったといつて過言ではない。

しかし紙幅の関係で往路の東京までしか紹介出来ず、この旅の全容については後稿に譲りたいが、彼が北海道に夢を抱き、博愛社や孤児院事業の将来を構想していたことの旅の一端は理解できよう。

- *1 関西学院大学人間福祉学部教授
- *2 関西学院大学文学部非常勤講師
- *3 関西学院大学大学院奨励研究員

〔凡例〕

- ・原則として常用漢字を用い、固有名詞・地名は原文の文字をそのまま引用した。
- ・史料上の句読点は、日記の記述をそのまま引用した。
- ・判読不能な文字は、□で示した。また、文字数が判明できない場合は「」で示した。
- ・原本中で、文字に疑問は無いが意味の通じ難いものについては(ママ)を附し、疑問の残る場合は(カ)を附して傍注した

※この研究は、文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(C) 課題番号19630588 研究課題「大阪『博愛社』の総合的研究―大都市における児童保護の歴史的検証―」の成果の一部である。

※本稿の解説は室田、解説は室田、鎌谷、片岡がおこなった。

六月一日（水曜）今日ハ朝より七大教育家伝を読み又役員諸氏と談話し又口の清めらるゝ事に付き考へ主に折れり則ち左の規律を嚴重に守るべし（一）午后十時就褥午前六時起褥則ち八時より十時間休眠（二）三度の食事の外何をも食せず殊に菓子等一切禁ず可し但牛乳其他滋養品は此限りに非ず（三）身体の運動海水浴をとる可らず

二日（木曜）今日は朝七大教育家伝を読み大に学ぶ所ありし又久しく休眠し夜は炭谷愛姉の楼上に於て孤兒院會議を開けり孤兒院將來の教育の方針ハ工業的農業的並行の主義を取る事主の聖旨に協ふ事と一同之を認めたり又午前ハ丹羽君を訪ね震災孤兒院の事を委細に尋問せし断然此際改革すべきを感じり今日主は余の心靈上大なる益を与へ玉へり又余が甘き菓子類を嗜む多年の積習を潔め玉へり又身心を主の全能の手に委して進むの大なる幸ひを感じしめ玉へり主を信じ其道を歩む時は凡ての事成就するの大なる秘訣漸く悟るに至れり主は信仰ある祈祷を必ず聞き給ふを漸く信ずるに至るを感謝すアーメン

三日（金曜）今日は午前六時起褥其より盥嗽を終へ聖書祈祷七時孤兒院朝の集まりに於て主キリストの前に於て兄弟姉妹一同の前に於て工業的農業的並行の主義北海道渡遊の目的信仰等に就き述べたり其より喫飯散步十一時二出発の準備をなせり石井兄及渡辺兄と共に將來の方針を談じたり又神ハ旅費衣服等を差支へなく与へ給へり十一時廣瀬庄作と共に停車場に行き十二時半の汽車に乗りて博愛社に帰る汽車中に於て新潟に働かるゝ教師コザト氏及神戸女子伝道学校生徒松本荻江姉と共に談話せり女教師より金壹円十錢松本姉より金二十錢寄付せらる夜は博愛社一同のものに信仰上及び事業上の談話をなせり十一時褥に就く

四日（土曜）積日の疲労にて午前九時頃迄就褥其より広島杉原ハナ姉

への書翰を認め又必要の談話をなして不在中の事を託し十二時半博愛社を出発し西尾雅胤氏荷物を持ちて送らる三時発の汽車にて明石に着し湊謙一氏の宅に立寄り別を告げ九時四十八分の汽車にて神戸ニ着し島中旅籠屋に投宿す本日明石停車場に於て神戸堀氏（堀貞一氏堀清氏の父）金二十錢寄付せらる明石にて將に乗車せんとするときに沢田寸二兄余を尋ね來らるゝに出逢ひし実に主の御恵みと云ふ可し夜は同兄と信仰上の談話をなし十一時就褥○今日は身体的にも靈魂にも著しく主の能の加はりしを感じしアブラハムの献子に就き明かに悟り得し実に感謝の至りに耐へず

五日（日曜）午前六時起褥盥嗽を終へ聖書祈祷喫飯其より澤田寸二兄の將來の方針に就き談話せり同兄が財産又ハ父母兄弟を全く振り捨て单身今より救世の事業に従事する事ハ主の聖旨に協ひ又遂には父母兄弟にもキリストに導くに至らんと勧めたり其より多聞教会に行き安息日学校に於て聖書（聖書約、十四ノ二十五—三十一）を研究し又山田伝道師の但馬豊岡伝道の模様を話さる大に喜び且つ主に感謝せり殊に少年会の働きが主動力となりて斯くの如き伝道の効を奏せしは實に感謝の至に耐へず十一時過ぎ帰宿澤田寸二兄と將來の方針を一層慎密に話せり喫飯を終へ小林茂兵衛を訪ね信仰上の談話をなし尚明晩委細に話す可きを約して帰る其より大塚正義氏の家族を訪ね又長田時行兄を訪ねしも病気にして面会するを得ず残念なりし其より松田治郎吉兄を訪ねしも不在其より大國眞太郎氏を訪ねしも不在其より貧民救済義会に行き植兄に種々談話し又將來の方針を談し孤兒院教育上の事を談話し大に益を得たり孤兒にも単簡なる勧めをなせり八時帰宿其より十時迄事務を取り十時就褥

六日（月曜）午前六時起褥盥嗽、診察、聖書、祈祷、喫飯其より博愛社への書翰を認め東京藤井氏への端書を認む之を差出せり又心霊

上の準備をなし昼飯喫し午后は望月与三郎君を訪ね教育上及び事業上の談話をなせり是より同君の妻君の紹介によりて浅井友太郎君を訪ね交はりを結べり「今日は南條助太郎氏を訪ねし余は其れ追主の導きと信ぜず一時の考へよりなしたる事は多く失敗せり爾年は主の導きと信じる事のみをなして勇進すべし」「無学無芸多病のものにして多くの孤児貧兒即ち万般の事に従事すべし多くのものを養育す天父の御恵みとキリストの愛を聖靈の御導きと兄弟姉妹の助けとによらざれば其目的を達する能はず故に先づ兄弟姉妹に逢ふ時は必ず其意見を聞き又其間に任せて意見を語るべし」「又我国各都会の地に於て働く人にして如何なる人真面目に伝道の事教育の事衛生上の事実業上の事に就き深く考へるなるかを測量すべし若し其の人なきときは其人の起る事を祈らざる可らず又其人を養成する事を計画せざる可らず之れあるも働きの道なくして空しくなるなれば其働きの道を聞かざる可らず」「将来の男女の教育家は信仰の厚き身体健康なる殖産上の智識と實際上の鍛錬を具備する完人物を養成を以て理想とすべし」「人事の事各国其風を異にす十歳よりは三年程修業せば衣食の道を得べし是の職人ハ放蕩無頼に陥り易し是れ畢竟便利にして且つ生活し易き故なり三百円の資本金を以て之に従事する時は三十人余のものを養ふを得べし」「マツチ製造軸製造当今軸木不足人夫の代はりに器械を用ゆるに至りたり」「錬化石製造東京鍛冶橋集治監に専ら之を製造す是れ日本将来有望の事業なり」織物製造製造の粗なると不熟練より起る物質の廃ると価の高きとによりて売れず故に監獄に於て失敗せり「チリ紙製造」是れも都会殊に開港場には尤も必要なる事業なり」夜は栢植貞之兄弟来られ以上の経験に就き談話せられ大に益を得たり

七日（火曜）「神戸平野村河井貞一君の養鶏所に四種の家禽飼育せら

る（一）レグホーン（二）プリモスロツリ（三）銀色ハンパーク（四）ゴラマ」「神戸教会員三谷嘉助君を訪ねマツチ製造の事を質問せり同氏は軸木を製するに手を広げ過ぎて失敗せらる但し或る支那人及兵庫本多氏は実は困難のうちより始め遂に成功せりとの事を話さる」「又同外氏の植物園に行き縦覽せり」「松永栄吉君を訪ね肺結核病に就き談話せり又鹿兒島の名産アメ餅を味ふたり」「兵神両港間のマツチ製造所へ明治社本多義和（義和）氏發起大坂府士族清燧社社長瀧川弁三、鳴行社社長播磨幸七、第二清燧社社長畑銀兵衛其他十二三軒の製造所なり」「松田治郎吉君を訪ね其に入浴し又震災地孤兒を引連れ桑名に行き大なる主の恵みを受けて事を話せり」「浅井友太郎君を訪ね教会の事又孤兒教育の事を話せり」

八日（水曜）今日午前は松田治郎吉小林茂兵衛兄来訪され日本を救ふと云ふ点に付き五ヶ条の意志を吐露せり両兄は是れ迄博愛社の事業に付き種々折りて助けらる又第十報博愛社と孤兒院へとの両書翰を認めて差出せり午后は松本荻江愛姉来訪され談話せり三時廿六分の汽車にて大坂に行き土佐堀五丁目渡辺旅館屋に投宿す夜は川口照暗女学校に行き同志の姉妹持川とら愛姉に面会し九時頃迄談話す同姉より金壹円を寄付せらる

天の父よ願くはとら愛姉を恵み主の忠義なる婢となしたまへアメン

九日（木曜）今日午前八時頃より北野村小林授産場に行きて其模様を見しに実に乞食盜賊の寄合場所の如く不潔不整頓実に嘆息之に至りに耐へざりし其より大阪救兒院に行き其様子を觀其より仏教青年会より設けたる孤兒院に行き觀其より慈恵女学院に至りて觀其より天主教会に設けたる教育院に行き觀たり其より昼飯を喫し再び大坂救兒院に行き談話し其より梅花女学校に行き朝井さく愛姉に面会して談話す其より大坂第仁村耕読園阿波松之助氏を訪ねる

も不在なりし夜は大坂市師範学校女子部教師小川はま愛姉に面談し教育上に付き談話せり十時就寢

十日(金曜)本日午前入浴して暫らく休息し居りし時に耕読園主阿波松之助氏来訪せらる十一時過ぎ迄農業上工業上商業上に付き談話せり大に益を得たり同氏は農業上に尤も熱心なる人にして當時はマツチ製造硝子製造の社に入りて専ら働かる、よし同志の経験によれば孤児を教育するには農業尤も適当なり工業は商業と密に親密なる關係を有する故余程注意して術を以て之を拡張する事必要なりと話さる午后は人力車を雇ひ大坂市中を徘徊して商業の有様を観察せり又商業倶楽部大坂博物館、府立大坂商品陳列所の三ヶ所を縦覧せし実に大坂は全国商業工業の中心にして全国工商業の權を握らんとせば居を大坂に占むる事尤も必要なり

十一日(土曜)午前は博愛社への書翰(第十一報)岡山孤児院への書翰(第二報)持川とら愛姉への端書東京藤井米八郎氏への端書東京林ウタ愛姉への端書を認め差出せり其より喫飯荷物を調ひ午后一時七分発の汽車にて京都に着す横田ます方に投宿す伝道師山田良齊氏に邂逅し種々貧民救済問題及び信仰上の談話をなせりその時に心に浮びしことは「まこともていのればことふ天の神アバ父様とよぶぞうれしき」晩食後京都バノラマ館に入りて明治維新革命の活画を見て大に感ぜり維新の革命は愛国の志士が血を流して購ふたる所のものなり明治第二の革命即精神的革命将来に來らんとす誰か血を流して其革命に従軍するか主よ愛国の志士を起し第二の革命を我国に來らしめ御国を我国に在らしめ玉へアーメン又同館の楼上より京都市中を眺めしに京都は三面山に囲まれたる地にして神社仏閣多く実に因循の地なり工商業は是の地に於ては發達せざる所也其より市中を徘徊するに

悪魔の機械備はれり実に慨嘆の至りに耐へず

十二日(日曜)午前同志社に行き小崎氏の説教(種蒔きの譬へ)を聞き大に感ぜり午后一時海老名弾正氏に会い伝道上及孤児院の將來に付き感じを述べ又同氏の考へを聞きし三時過ぎ山室軍兵氏來られ談話せり晩食后共に散歩して城内に行き山室君は同志社の帰られ余ハ小崎氏の宅に行けり書翰を残して帰りしは九時なりし「ふとんきてねたる姿や東山」

十三日(月曜)今日は午前九時頃より人力車を雇ひ京都市中を徘徊せり神社仏閣の浩大なる事に驚けり斯る建物ハトテモ算盤上にては建てらるゝものに非らず算盤外の信仰心より建てられたるものなり是れ算盤外の人物の非常の言行によりて起る人民の信仰心よりなれる事と思へば信仰心の働きも亦大なる哉生きたる天父を信するの信仰は我国を救ふ事疑ひなし又家禽会社長福田徳三郎氏を訪ね種々談話せり養鶏の実に盛なる事を話さる又家禽飼育所に行き實際を縦覧せり当今親鳥と雛と合せて二千羽程飼育す一ヶ月に百円程の純益あるよしなり併し余程熟練したる技手にあらざる時失敗し易し又人工孵卵器を見し其価三十円内外又平瀬家禽園に行き其模様を縦覧せり二三百羽の洋鶏を飼養し多大な随分利益なるべし京都市中の工商業ハ別に盛大に非らず三四の製造所と日用品の販売あるのみ京都ハ別に工商業の地に非ず青年男女を教育するには適當の場所なり夜は同志社阿部清造(阿部)山室軍兵、大和田猪平、佐々倉代七郎氏来訪せられ信仰上事業上伝道上の談話をなし午后十二時に至る

十四日(火曜)昨夜の疲労にて八時頃迄就寢山田良齊氏來られ一人の青年の前途の方針につき話さる即ち信仰上の談話をなせり主に祈りて前途の方針を定むるならば信ずる如く成るべしと勧めたり又大目的を達する迄如何なる賤業に従事するも厭ふ所にあらず

ざる事を語り其青年の名は根岸通と云ふ午后は小崎弘道氏を訪ねて教会に関する意見孤児院将来に関する意見を聞きし其より同志社事務所に行き加藤壽君に面会し種々談話せり又日向国荒蕪地の開墾談を聞けり夜は工商業の対外策につき研究し早くより眠に就く

十五日(水曜)午前は十二報博愛社及び孤児院(第三報)を認め差出せり十時横田楼を辞して京都ステーションに行き十一時三十分発の汽車にて出発し午后三時三十分大垣に着し玉屋に投宿す其より本田伝道師宮崎利通君に面会し種々談話せり又自助会の今日迄発達せし略歴を聞けり七時過帰宿富田元資君来訪せらる九時過宮崎利通君来訪せらる十二時迄事業上信仰上につき談話せり宮崎氏に話せし事ハ伝道及教育の方針慈善事業の将来の方針農工商の将来の方針及び感情に克つ事口に克つ事倚己心に克つ事キリストの平安に充さるゝ事又ハ事業をなすに氣ヲイラダテ、急ぐ可らざる事自修鍛練を怠らざる事始めは小さく基礎を堅く置く事等を談話せり

十六日(木曜)今日午前富田元資君を訪ね日本当今の教会の有様将来伝道の方針震災伝道の方針を談ぜし午后は永田氏家族を訪ねて談話せり午後五時半より郡長館本徹君を訪ね震災後の模様聞けり即ち震災后尤も幸福なりしハ下等社会にして上等社会に大なる損失を招きしも先づ安全なり中等社会に至りては尤も困難にして労働する能はず資本金なく四方に散乱するの景況あるよし女子の如きは遂に汚穢社会へ墮落するもの多きよしなり当今は酒色に浸るの風尤も盛んにして遊郭の如きも震災前よりも家数多くあり芸妓の如きも其数を増加せしよしなり之によつて考ふるに震災地の付近ハ今一層力を込めて働く可き時なりと信ず伝道に兼て社会改良の策を実行する事も亦急務なり夜は日本聖

公会大垣講義所に於て説教せし聴衆は三十名餘なりし閉会后兄弟姉妹と共に信仰上の談話をなし十一時帰宿褥に就く

十七日(金曜)「今日午前高城牛五郎氏小出一太郎君来られ当今教会信徒の信仰の模様牧師伝道師の働きの模様青年教役者自修鍛練貞潔制口真正の平安等の徳を具備し非常なる働きをなさざる可らざる事を話せり又小出一太郎氏の信仰と養老院の事に付き尋ねたり」以上は十八日の午前でありし事なり誤つて茲に載す

今日は午前宮崎利通君来訪され信仰上の談話と自助会将来の事に付き話せり又本田伝道師も来訪され大垣伝道の事に付き談話せらる案も亦意見を述べ置けり午后富田元資兄の宅に行き村上さんと伝道婦も来られ共に大垣伝道の方針に付き談話せり大垣人民に一方にはキリストの福音を単純に説くと共に一方には社会的の問題を講究してこれを宣伝せざる可らざる事を話せり實に今は大垣人民に熱心に福音を宣伝すべきときなり午后三時二十分の汽車にて岐阜に着し岐阜太田町小見山旅館に投宿す暫らく休眠六時頃より宣教師チャペル氏を訪問し八時頃岐阜基督美以教会に行き説教を頼まれ即ち真正の平安を述べたり十一時頃村田□兄と面会し十二時頃込信仰上伝道に付き談話せり今夜小出一太郎兄一木敬太郎兄高木牛五郎氏に面会せり十二時褥に就く

十八日(土曜)午前には小出一太郎君高城牛五郎氏宮崎利通氏来訪され種々談話せり十一時頃菊地三郎氏主任の実業救済会に行き老人少女にキリストを陳べたり午後一時六分発の汽車にて名古屋に着し震災孤児院に到着す其より暫らく休み居りしに宮崎利通氏来訪せられ自助会将来の方針につき談話せり夜は震災孤児院にて働かるゝ兄弟姉妹と共に信仰上衛生上の談話をなせり
名古屋震災孤児院入院者姓名

(※ここに四九名の孤児の本籍住所、生年月日、氏名が記されているが略した以上養育の労を取らるゝは泥谷梅愛姉矢島琴愛姉実業掛西山喜十郎兄教育兼事務掛加藤六郎兄なり是れ辻渡辺龜吉君(妻君ハ渡辺)なりしも明治廿五年六月十三日岡山孤児院へ転任されたり
当今ニテハ主任者欠員なり

震災孤児院への寄附

○明治廿四年十二月中の寄附金総計金八十一円十九銭也 九口

○廿五年一月中の寄附金総計金三百二円七十九銭四厘也

六十七口

○々々二月中の寄附金総計金八十一円二十一銭也 三十二口

○々々三月中の寄附金総計金百二十四円九十銭一厘也 二十七口

○々々四月中の寄附金総計金百四十四円八十四銭九厘也 十七口

○々々五月中の寄附金総計金百十五円九十八銭六厘也 二十八口

○々々六月十九日迄の寄附金総計金二十九円卅五銭二厘五毛也

十二口

外々々金千二百二十円 バックストン氏より寄附

右金合計金二千円二十八銭二厘五毛

震災孤児院支出金

○明治廿四年十二月中の支出金高五十一円七十銭八厘也

○明治廿五年一月中の支出金高四百一十一円二十一銭七厘也

○々々二月中の支出金高百十四円十八銭九厘五毛也

○々々三月中の支出金高百六十四円三十八銭七厘也

○々々四月中の支出金高六百三十八円六十一銭也

○々々五月中の支出金高二百四十二円十四銭四厘也

○々々六月十四日迄支出金高九十五円十七銭七厘也

合計金千七百十七円四十三銭二厘五毛

震災孤児院孤児実業収入金

○明治廿五年三月中ノ収入金五十七銭七厘也
○明治廿五年四月中ノ収入金十一円十五銭也
○々々五月中ノ収入金九円三十四銭五厘也
○合計金二十一円〇七銭二厘

震災孤児院の物品寄附

○明治廿五年一月中の物品寄附総計七三十一円 衣食家具書籍其

他雜品

○々々二月中ノ物品寄附総計百二十二点 同上

○々々三月中ノ物品寄附総計三十七点 同上

○々々四月中ノ物品寄附総計四十八点 同上

○々々五月中ノ物品寄附総計九十点 同上

○々々六月十九日迄物品寄附総計十九点 同上

震災孤児院内安息日学校教員

(1) 清流女学校教員遠藤千代 (2) 清流女学校生徒見田功

(3) 同校生徒加納はや (4) 同校生徒井戸

震災孤児院ノ為に祈リテ働る、人

(一) 愛知県庁議事堂の横美山貫一 (二) 名古屋武平町丸山愿

(三) 名古屋関鍛冶町百二十二杉山重義 (四) 豊杉野町ウキンビ

シユ一 (五) 南外堀町鈴木かい (六) 前津富士見境村瀬

十九日(日曜) 今日ハ震災孤児院内に終日止まり靈魂上の修養を務めたり午前の安息日学校にては撒、后三ノ十二付蜜蜂の勤勉を述べて神の前に誠実勤勉なるべきを勧めたり又役者方に京坂神地信仰の模様又信仰復興に就き話せり午后は孤児院の事務上を取調べたり夜は役者方に神に罪の赦る、事又人の罪を赦す事に付き話せり午后十時就褥

二十日(月曜) 今朝は午前六時起床其より喫飯朝の集りに馬と豚につきての話しをなせり其より二階に於て祈りをなし聖書を読み

七時頃より各愛児姉を訪問せんが為に出懸けたり第一番(カ)に日本聖公会宣教師ロビンソンを訪ねたり其次に同氏の設立にかゝる養老院に行きて觀たり寄るべき老人を引取之に教育を施し我国の多くの老人の模範をつくり老人伝道を傍らなす事は主の聖旨に協ふ一つの事業なりと信ず願くは天の父よ老人の為に献身する有為の人を起し給へアーメン其より杉山重義兄を訪ね伝道上の事孤児院の事業に付き談話せり其よりウインピシユ姉を訪ねて暫らく談話し其より商法の盛んなる廣小路本町通を通行し商業上の風を視察せり殊に昼飯を喫するに廣小路の或る牛肉店に登りしに其の下女の注意力且つ働きの模様の鈍きに驚けり以て名古屋人民の柔弱怠惰に陥りし事を憤れり其より本町通を通り商法の模様を觀察せし又遊廓の模様を觀察し其より宣教師ガードナル女教師を訪ねて談話し其より鈴木才三君を訪ね活版工業につき尋ねたり其より村瀬翁の陶器製造所に行き工場を縦覽し且つ陶器につきての履歴を聞き十四年の星霜を経て今日に盛大に至りし事を聞き大に感ずる所ありし其より伊藤圭介氏の子息伊藤延吉氏の宅に行き令閨に面会し子息中野功次郎氏の事に付き談じ其よりヲルデン氏を訪ね又丸山愿を訪ね晚餐を食し七時頃杉山重義氏の宅に行き夜は十一時迄震災孤児院将来の方針に付き両氏の意見を聞き又自らの小児をも語れり十二時帰院就禱

二十一日(火曜)午前高城牛五郎氏来訪せらる又伊藤よし子愛姉も来訪せらる又或る老母も来訪せらる其老母の案内にて名古屋市近き今井信太郎氏の飼鶏所に行きて其模様を視察し且つ種々の経験を聞けり名古屋は全国第一等の地位を占めたるよし当今名古屋市中及び近辺に五十一ヶ所餘の飼鶏所あるよし皆同業者組合を立て益々研究し居るよし当今は支那より多くの卵を我国に輸

入するよし飼鶏業を拡張し其輸入を防ぐ事は当今の急務なり博愛社のもの奮発せざる可らず今日は広く飼鶏業を訪ねんとせるも雨天になりし故に遂に其意を果さず高城牛五郎氏の宅にて久しく休み帰れり夜は孤児に別を告げ役者諸氏に信仰上の談話をなせり博愛社への書翰(第十三報)岡山孤児院への端書を認めたり

二十二日(水曜)午前出発の準備をなし八時二十分発の汽車にて名古屋を發し其より駉々午々して進み十時過ぎ豊橋に着す即ち美以教会伝道師清水俊三君を訪ね三川伝道の模様を聞きし一時卅六分発の汽車にて豊橋を發す豊橋ステーションにて芳賀祐之助兄へ此度は立寄る事能はざる由を申やれり今日は風雨甚しくして汽車中より四方を眺むる能はざりし睡眠と窮屈の中に遂に新橋に着す午后十一時五十分なりし其より銀座二丁目西本旅館屋に投宿す疲労の餘直に褥に就く今日或る人汽車に乗り或るステーションにて下車すべきに睡眠して其ステーションの各車に入らず將に発車せんとするときライアケテラクレと再三呼びしも汽車は直に發し遂に横浜近くまで乗り越したり嗚呼残念なりと叫ぶのみなりし我儕我等が天路を歩むも亦此の如し豈に警戒せざる可けんや

二十三日(木曜)今日ハ昨夜疲労の為九時頃迄就禱其より起褥喫飯十時頃立教女学校林ウタ姉への端書を出し其より人力車を雇ふて麹町区下六番町女学雑誌社に行きしも藤井米八郎君も岩本善治君も不在なりし其より女子学院に行き廣瀬うめ愛姉矢島かじ女史に面会其より人力車を雇ひ市中を巡視せり途に丹羽清次郎氏横井時雄氏を訪ねし不在田井正一氏を訪ね信仰上伝道上の談話をなせり其より本郷を経て下谷に行き上野公園内を通り浅草に出て鶴渕初蔵氏を訪ねて暫らく談話其より帰途に就く夜は林ウ

夕姉名出いく姉中川せき姉小澤きく姉来訪せられ信仰上傳道上
孤兒院の事に付き話せり

二拾四日(金曜日)今日は七時頃起褥藤井米八郎氏よりの端書到着直
に喫飯王子村ノ□瀧野川村に向つて出発九時廿分頃孤女学院に着
す大須賀亮一君矢野もとよ姉他二人皆腸チブス病に罹られ臥床
二三の孤女等も病氣是れ全く氣候の不順に因するならん即ち帰途
王子山に登り主に祈りし事(一)博愛社前途の爲(二)岡山孤兒
院及震災孤兒院の爲(三)孤女学院の爲附大須賀亮一兄の爲(四)
余の靈肉の益々強壯に赴き主の使命を全ふする爲

午后一時十六分発の汽車にて王子を發し上野に着し其より人力車
を雇ひ本所養育院に行き看病婦大塚もとの姉に面会し其より同姉
の紹介にて幹事安達憲忠君に面会し養育院の模様を聞きし当今人
員六百名程入院し居るよし一ヶ月の経費一千五百円之か爲に働く
役員五十名程なるよし六百名の内三百名程は遺児棄兒迷兒にして
其他は親戚なき老人療養不具等なり余彼等の有様を觀て實に感じ
たり世には斯る不幸のもの多くある由我儕は實に神の恵みにて幸
福なる生活をなすを得るは實に感謝の至りに耐へざるなり彼等の
爲に祈り彼等の爲に尽さざる可らず又彼等は僅かに衣食を得ると
雖も靈魂上の安心と慰めのなき事は一層憐れに感ず願くは彼等が
靈魂上の安心と慰めを得るの道の開かれん事をアーメン其より築
地新栄町に行き東京救育院に行き震災地より来る孤兒に面会せり
東京救育院は其家屋は甚だ美なりと雖も之が主任者なき事は甚だ
残念なり其より銀坐に行き西本旅館屋を辭し麴町区下六番町女学
雑誌社内の一室に移転す夜は藤井米八郎兄星野慎之助兄湯谷瑠一
郎兄に面会して信仰上事業上の談話をなせり十一時褥に就く

二十五日(土曜)今日は午前中は執務上の順序を定め又靈魂肉体の修
養をなし又必要品を購求し午后は上野或る茶亭に開かる、下谷基

一〇
督教会の親睦会に臨み目下の問題なる伝道及びキリストアン信仰
復興に付き意見を述べたり午后五時頃より築地南小田原町小沢き
く愛姉を訪ね一同(七人)にキリストの福音を述べたり午后十一
時帰宿褥に就く

二十六日(日曜)午前は東京養育院看病婦大塚もとの姉来談せらる東
京養育院は当今キリストアンの看病婦を求めつゝあるよしなり願
くは之に応ずる看病婦の出で来らんことを九時頃より牛込教会に
集まりし服部綾雄氏のキリストの種蒔の譬へに付き話さる兄弟姉
妹と始めて面会せし其より帰宅星野兄と談話三澤兄来訪され午後
四時女子学院に行き青年会の集りに列したり服部綾雄氏の卒業生
に対しての勧めを聞きし其より帰宅星野兄に至り青山神学校生徒加
藤新一兄来訪され罪の清めらるゝ事に付き話せり又川合信水兄と
信仰上の談話をなせり十一時褥に就く 今日小沢きく愛姉よりの
葉書到着林ウタ愛姉への書翰明石湊謙一氏への端書を出せり

二十七日(月曜)午前は静かに聖書を読む事と祈る事と博愛社(第
十四報)震災孤兒院への大垣自助会宮崎利通氏への端書を認め差
出せり午后は上野茶亭に至り林ウタ愛姉に面会し彼の今日に至る
までの信仰の履歴又将来の方針につき話せり彼姉が神の恵みの中
に次第に發達して今日に至りし事は實に主に感謝せり又共に鶯谷
の芝生の上にて神に祈れり十時帰宅十一時迄川合信水兄に談話し
褥に就けり

二十八日(火曜)午前は聖書を読み祈祷をなし岡山孤兒院への書翰(第
四報)を認めたり午后は精神大に疲労し五時頃迄休眠せり夜は島
崎氏川合氏と共に信仰上の談話をなし大に益を得たり其より三沢
黙次郎氏の宿所に行き信仰上の談話及愛隣会将来の爲に祈れり

二十九日(水曜)午前は聖書を読み祈祷をなし九時頃より市中を巡視
せり先づ最初に女子実業学校を訪ね種々尋問せしも校主影山英子

女史も不在にて委細聞くことを得ざりし其より神田一ツ橋通り町私立共立女子職業学校に行き其校内の模様を縦覧観察し殊に女子が熱心に職業を学びつゝあるを觀実に歡喜の至りに耐へず願くは是種の学校益々多からん事をアーメン其より浅草倉前工業学校に行きしも二見一策君會議の爲面会をなすを得ず其より京橋区越前橋中川嘉兵衛氏を訪ね幸ひ農学士諏訪鹿三君も来訪せられ共に北海道の模様を聞き大に益を得たり其より帰宿四時半頃より巖本善治氏と談話し夜は感話会をなせり

三十日(木曜)今日は午前より午后へかけて明治女学校教授の模様を

縦覽せし即ち修身(巖本氏)代数(吉田伸子)孟子(八木兼辰)

植物学(星野慎之助氏)体操(森田武)武道(星野慎之助)四時

頃小沢きく愛姉齊藤しづ

子来訪せられ信仰上及び

女子教育に付き話せり夜

は女医荻野ぎん子に面会

し種々談話せり又孤女院

将来の方針に就き話せり

明治廿五年七月一日(金曜)

今日は午前六時起床聖書

祈祷又北海孤兒院震災孤

兒院への端書を認め差出

せり其より旧友三浦蓮太

郎氏を訪ね精神上的の談話

をなせり同氏は医学十三

浦省軒氏の養子となる

なり午后本郷区福田会育

兒院に行き其模様を觀た

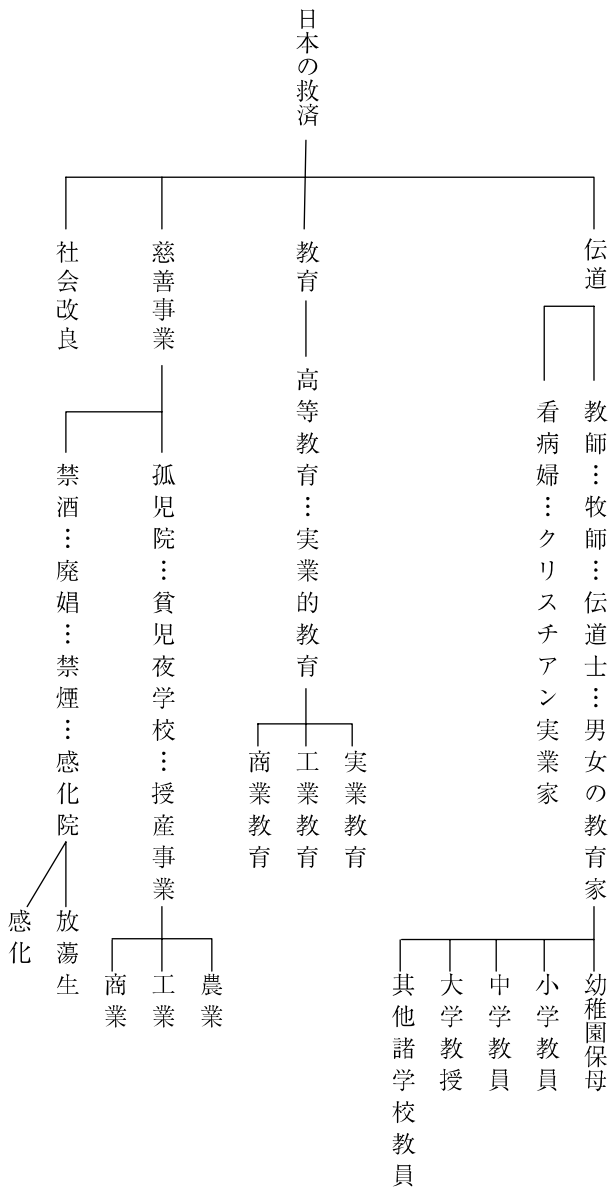
り同院は一歳以上六歳未満の孤兒を救済し成長の後は養子養女に遣はし又独立の職業に就かしむ法方なるよし創立より今日迄二百六十人餘救済したるよし当今は六十餘人養育しあるよし其より大須賀兄の病氣を訪ね其より青梅学校主山本正義君に面会して信仰上の談話をなし其より下村氏を訪ねて信仰上の談話をなし夜は上野伝道会に集り共に祈り又説教を聞けり今夜博愛社より書翰來着岡山孤兒院に神の試練來り前田兄ブライト病に罹り又寄附金も甚だ少なき事を報知し來れり神の前に切に祈りし

二日(土曜)今日は早朝より起き聖書祈祷をなし八時の汽車にて王子

に行き孤女学院に行き其より石井某の二階にて藤井米八郎氏と共

に種々の問題を講究せり湯谷蹉一郎兄も來会せられ信仰上又將來

日本の救済



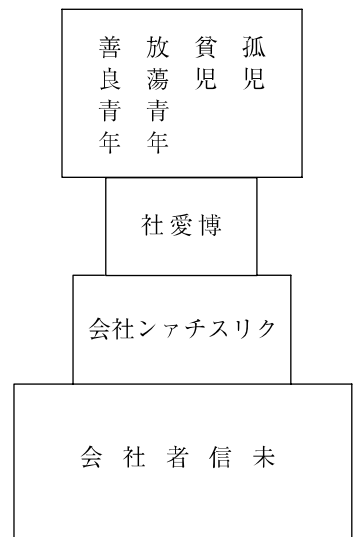
の日本に関する問題を互ひに講究せり夜は下谷基督教会に行き祈
禱会に列せり又真正の平安を得るに付き感じを述べたり

三日（日曜）午前七時頃より神田基督教会（余の靈魂再生の場所）に
行かんとして女学雑誌社を出で八時頃に着す小児日曜学校に於て
岡山孤児院の現今の模様を話せり次に田井正一氏のキリストチア
ンの品格に付き説教せられたり大に益を得たり休息所に於て昼飯を
喫し兄弟姉妹と談話し其れより本郷会堂に行き横井時雄君を訪ね
しも不在其より或る青年に導かれ其宿所に行き種々談話せり夜は
北川千代吉氏と将来に関する問題を話せしも不幸にして時間不足
其意を尽さず其より横井時雄君を訪ね暫らく談話し他日の再会を
期して帰宅す（※前頁の表がここに入っている）

決死 二十世期ハ日本国民が萬国の大国民の仲間入するか全く奴
隸の如くになりて滅ぶかの二途なり我儕倭民族たるもの豈奮勵せ
ずして可ならん哉

四日（月曜）昨日の疲労にて八時頃迄就褥其より松田順平（仙台孤
児園主任）本郷定次郎（暁星園主任）博愛社石井十次「前田英哲
小橋礼太郎」の諸氏への端書を出せり又林ウタ愛姉への書翰を認
め来る土曜日面会又金曜日夜岩佐塚三氏に面会の為に出づる事を
約せり小澤縫殿助氏来談せらる同氏将来の方針に付き種々談話せ
り同氏は□農を好むと雖も父母の勧めの為に医学を修めんと志さ
る、よし午后星野慎之助兄と個人将来の事に付き又博愛社計画の
事業に就き話せり同氏も大に同感を表せらる夜は有志の兄弟姉妹
十四五人に岡山孤児院の由来博愛社の由来及び其合同の由来震災
孤児院の由来を話し神の妙なる御摂理を味ひたり「あ、神の智と
識の富は深かな其法度は測り難く其踪跡は索ね難し」

○誠に実に爾曹に告げん我を信するものは我行とするの事を行ん
此より大なる事を行べし蓋我父へ往ばなり



○イエス答て彼等に曰けるは神を信ぜよ誠に我なんぢらに告げん
誰にでも其心に疑ふ事なく其いふ所の言は必ず成べしと信じ
此山に移りて海に入れといふいはく其言の如し成るべし其故
に我なんぢらに告げん凡そ祈禱の時その求ふ所のものはず
得べしと信ぜば必ず得べし（馬可伝一ノ二十二―二十四）

○イエス彼に曰けるは爾もし信する事を得ば信する者に於て為能
はざる事なし馬可、九ノ二十三、
○誠に実に爾曹に告げん一粒の麦もし地に落ちて死すば一にて存
人もし死ば多の実を結ぶべし約、十二ノ二十四、

五日（火曜）午前七時頃起褥其より聖書を読み祈禱をなし数日來の炎
暑の為又少しく食事を誤まりし為大に胃を損じ疲労せり少しく休
み居りし時に暁星園主任本郷定次郎氏来訪せらる暫時暁星園今日
の有様を聞きし其より同伴して出口たか女史を訪ねし又本郷君の
妻君に面会したり共に主の御恵みと信仰上の談話をなせし其より
歸りて震災孤児院への書翰を認め差出し將に他出せんとせし時に
中川嘉兵衛君来訪せられ震災孤児院への寄附金百円の手形を渡さ
る同君の寄付金につきては一度催促し致し呉れとの事なりしも主

の導きによりて中川嘉兵衛君の衷情よりなさる、事を祈りて別に催促をせざりし然るに今日突然来られ百円の手形を出し震災孤児院へ送り呉れとの事又同君の云はる、には是の寄附の世間に顕はる、を厭ふ願くは北海の一農夫寄附致すべし呉れとの事斯る寄附こそ主の前に喜ばる、寄附と謂ふ可し余は中川氏の寄附の神の前に登りし事を感謝すアメン其より直に其手形を名古屋震災孤児院に送れり其より四ツ谷西信濃町川村正平君を訪ね久し振りにて談話せり帰宅後暫時運動をなし夜は種々研究をなし又信仰上の談話をなし十時褥に就く今日北海道林竹太郎兄より端書到着早く来れと申越されたり

六日(水曜)今日も少しく疲労して休み居りし然るに本郷定次郎兄来訪され種々将来につき談話せり又博愛社への書翰(第十五報)を認む夜は湯谷瑳一郎兄来談せらる又同志感話会を開き共に祈れり
 七日(木曜)今日は昨夜の不眠の為に大に疲れ八時頃迄休み居りし其より準備をなし長谷川久吉氏を訪ねんとして本郷菊坂に行きしも遂に見当らず其より本郷勸業場に行き品物を縦覧せし石版画の店に至り坂田金時幼時の有様を画きしものあり余之を見て大に感じたり又白虎隊戦死の図を見て大に感じたり其より浅草倉前工業学校に行き縦覧せり大に感ずる所あり其より浅草公園地に行き暫らく休息又上野公園地に行き暫らく休み少しく腹部の加減の悪しき為に帰宅直に褥に就く

八日(金曜)今日は早朝起きて準備をなし九時頃より人力車を雇ひ銀座博聞社に行き村尾元之助氏を訪ねしも不在其より農商務省に行き諏訪鹿三君を訪ねしも不在小澤縫殿助氏を訪ね又石川政則氏の宅を訪ね小野田鎮氏の事に付き又小野田老母の帰京の事に付き種々談話せり其より築地明石町美以教会牧師石坂亀次君を訪ね談話し其より牛乳とパンにて昼飯を喫し其より井上文慈郎君を訪

ねしも不在なりし其よりステーション前麻屋に行き原胤昭君を訪ねしも不在其より赤坂靈南坂町靈南坂教会牧師綱島佳吉氏を訪ね種々談話し其より赤坂病院ホイトニー氏を訪ねしも不在其より麻布本村町安藤太郎氏を訪ねしも不在又農社津田仙翁を訪ねしも不在其より芝白金三光寺村向館主田村直臣氏を訪ね種々談話したり又同氏の宅に下婢として務め居らる、姫路教会の信徒井上はな姉に面会せり其より明治学院に行き下より其建物を眺め直に井深梶之助氏の宅を訪ねし種々教育上の事孤児院事業の将来に付き又同氏の洋行の際米国ニューヨーク孤児院又ヒヤデルヒヤ府のジエラルドコレジを參觀せられし時の感じを述べらる大に益を得たり其より築地立教女学校に行き岩佐琢三氏小宮珠氏に教育上事業上の談話をなせり其より原胤昭君を訪ね監獄教誨監獄改良免囚保護北海道開拓の事に付き談話せり十一時小沢さく姉の宅に投宿

九日(土曜)今日は疲労の為に十二時頃迄休息午后は林ウタ愛姉来談せらる益々其決心の堅くする事を話さる晩景に及んで帰社せんとせしに甚しく下痢し大に疲労せり遂に小澤氏宅に宿せり小澤さく愛姉姉妹の一方ならぬ介抱を受けしは実に感謝に耐へざるなり
 十日(日曜)午前は人力車を雇ふて帰社す幸ひ信仰上の集りに列し共に神に祈れり午后は社内にて一同団欒して談話せり夜は礼拝堂に於て平安と喜樂につき話せり九時頃より岩本兄の宅にて七名ほどの人々と孤児院と博愛社の将来に就き話せり

十一日(月曜)今日は終日腸胃の調はざる為休めり頻りに渴を覚へ少しも食気なく且身体疲労して吸嗽喀痰少しくあり今日は何等の業をもなす事能はず只褥に伏してありし今日斬髪せり

十二日(火曜)今日も尚腸胃調はず午前より午后へかけて休めり、夜は明治女学校取締呉くみ子姉外二名の姉妹に聖霊を受くる事キリストの十字架愛の実行の三個条につき話せり今日午前村尾三之助

氏来訪せらる博聞社の困難商業界の□□を話さる

十三日（水曜）今日も午前より午后にかけて岡山孤児院への書翰（第五報）を認めたり又呉くみ子愛姉来訪せられ種々談話来る日曜の晩に孤児教育につきての談話をなす事を約せり晩景より矢島かじ子愛姉に面会し種々談話せり其より帰社名出いく愛姉来訪せられ種々談話せり十一時褥に就く神は呉くみ子愛姉の手に由て靴を一足、ハンケチ二品与へらる

十四日（木曜）今日も午前より午后へかけて博愛社への書翰（第十六報）前田兄への書翰大須賀亮一兄への葉書、名古屋伊藤延吉氏への葉書震災孤児院への葉書を認め差出せり又姫路教会の露無文治兄井上恒次兄両氏への葉書沢田寸二兄への葉書水守立節氏への葉書を認めたり又田井正一氏へ信仰之友を返したり夜は番町教会の祈祷会に列し孤児院将来の難問を話し且つ祈れり牧師原田助氏に始めて面会せり其より三沢黙二郎を訪ね二三の兄弟姉妹と談話をなせり

十五日（金曜日）午前は原田助君を訪ね同君洋行中の聞見を委細承はりたり殊にムーデー氏の品格を聞き大に感ずる所ありし又同君は余の精神を助けられ一冊の書物を与へらる（是れは露国のトルストイ伯の著わせし書にして勤労の大切なる事を論ぜしものなり）午前は岩本氏の妻君に面会せり午后は丹羽清次郎君に面会の為神田区三崎町込散歩せしも同氏不在雨天遂に帰社夜は巖本兄と将来に関する問題に付き談話せり又トルストイ伯の著わせし書物の大意を聞きし大に益を得たり